

# 虹の女神 Rainbow Song

2006(平成18)年9月27日鑑賞(東宝試写室)

★★★★



監督=熊澤尚人/プロデュース=岩井俊二/原案・脚本=桜井亜美/出演=市原隼人/上野樹里/蒼井優/酒井若菜/鈴木亜美/相田翔子/小日向文世/佐々木蔵之介(東宝配給/2006年日本映画/117分)

……映画研究会で活躍するヒロインと、ちょっとニブい今ドキの若者を中心とした瑞々しい青春群像劇は魅力いっぱい。一万円札を折った指輪という小道具と、奇妙な水平の虹という印象的なテーマが面白いが、8ミリ映画『地球最後の日』のテーマが暗示するものは……？ この20歳の記念作をステップに、上野樹里にはさらなる飛躍を期待……。

## 第4章

好きだから、ついにやっちゃいました！

### 映像ワークショップ VS 映画研究会

柳町光男監督の『カミュなんて知らない』(05年)は、2000年5月に愛知県で起きた高校生による老婆の殺害事件をテーマとした、実に面白い青春群像劇だった。そして、その主人公たちが所属していたサークルは映像ワークショップで、彼らは映画『タイクツな殺人者』の製作に奔走中だった。他方、『虹の女神 Rainbow Song』は、映画研究会のサークル員を中心とする青春群像劇で、ヒロイン佐藤あおい(上野樹里)はこのサークルに所属し、目下監督として『THE END OF THE WORLD 地球最後の日』を製作中。『タイクツな殺人者』もアツと驚く結末だったが、ラスト近くに8ミリフィルムで上映される『地球最後の日』のアツと驚く結末は……？

### 2人の仲は……？ こんなのがフツの大学生……？

あおいは勉強しているとは思えないが、ビデオショップでのバイトの他、好きな映画製作に夢中で取り組み、それなりに充実した大学生活を送っている様子。

しかし、あおいから強引に引っ張り込まれたことによって、『地球最後の日』の主演を演ずることになった岸田智也（市原隼人）は、何から何まで中途半端で、成り行きまかせの大学生活を送っているとしか見えない。

この映画は「章立て」で分けられており、2章、3章はあおいと智也との出会いと映画製作の様子、そしてその中での互いの心のふれあいを描くもの。2人の出会いは最悪で、あおいと一緒にビデオショップでバイトをしている久保サユミ（鈴木亜美）に接触するため、智也があおいにストーカー的に声をかけてきたことがきっかけ。派出所に飛び込んだり、タクシーに逃げ込んだりというドタバタハプニングを展開させながら、他方で一万円札で折った指輪や水平の虹という美しいエピソードを散りばめて2人の仲を描いていく手法はさすが……。興味深いのは今ドキの大学生のしゃべり言葉で、男と女の差がほとんどなくなっている感が強い。しかし、そんな男っぽい言葉のやりとりの中にも、実は彼女の想いは……？ もっとも、誰がどう見ても2人は「女上位」の関係で、あおいがすべてをリードしているようで、それは就職してからも同じ……。

## 妹はホントは恋のキューピット……？

この映画は岩井俊二のプロデューサーらしく俳優陣が贅沢で、主演女優の上野樹里の他、今や十分1人で主演を張れる実力を持った蒼井優が、あおいの盲目の妹、かなとして登場する。この映画では、かなはあくまであおいの引き立て役に徹しているが、夏祭りにおける2人のデートを陰ながら支えたり（?）、飛行機事故であおいが亡くなった後の智也の想いを辿る手助けをしたり、かなり重要な役割を……。この演技をみても今後の大飛躍が期待される女優であることを再確認！

## いい上司に恵まれると……

レコード・映画の製作会社や芸能プロダクションは、表面上の華やかさとは裏腹に、内実は大変な商売であることが『東京フレンズ The Movie』（06年）や『バックダンサーズ！』（06年）を見ているとよくわかる。そんな目でこの映画を観ると、あおいが就職した映画製作会社の上司、樋口慎祐（佐々木蔵之介）がおいしい味を出している。一見ギョーカイ人そのものの雰囲気、いくらでもおいしい加減

になれるのだろうが、ある日飲んだ勢いでした(?)「お前、会社辞めろ。もっと広く世界を見ろ」というアドバイスを、あおいがまともに前向きに受け止めたから樋口もビックリ……。あおいの決断はアメリカのロスへ渡っての一人生活。そんなあおいの決断を承認したうえ、あおいの後釜として智也を採用することをオーケーするなど、この樋口は実にいい上司……。

## 智也の仕事ぶりは……？

智也の仕事上の能力は実際のところはわからないが、映画の中ではボロクソ。いるいる、こんな大学卒の若者がゴロゴロと……。 「一体大学で何の勉強をしてきたのか！」と怒鳴るのは10年前のパターンで、今はそんなことを期待してもムリ。せめて上司の求めていることを理解し、最低限「できる or できない」と言ってくればいいのだが……？

これでは、「お前なんか辞めちまえ！」と怒鳴られるのは当然だし、その挙げ句、上司に「相談があるんですが……」「辞めようと思っているんですが……」というパターンになるのも当然。さて、それがこの映画では……？ このように、智也は仕事上でもかなりの間抜けぶりをさらけ出しているが、女性関係でもかなり怪しそう……。

## 年上の女性はいくつまでオーケー……？

最初のサユミへの接近は不発だったが、『地球最後の日』で共演した秋田美人(?)の浅倉今日子(酒井若菜)へのアプローチは……？ もっとも、自分で告白もできず、ラブレターも代筆を頼むようではちょっとムリ……？

そんな智也に対して、逆に強引なアタックをかけてきたのが、あおいに仕事上連れて行ってもらったデートカフェ(お見合いパーティー?)で知り合った年上の女性、森川千鶴(相田翔子)。大学を卒業したばかりの智也は24歳だが、彼女は26歳とのこと。あれよあれよという間に、千鶴の部屋の中に入り込み、事実上の同棲生活が進み、妊娠騒動を含めていよいよ両親とのご対面を経て結婚という局面に至ったが、驚くことにそこまで智也は状況の流れに身を任せたままという有り様。一体智也の意思はどこにあるの、とイライラしてしまうが、ある日、あ

るきっかけで彼女の年齢が34歳であることが判明すると……。

## 惜しまれる人ほど早く……

去る9月24日俳優の丹波哲郎が亡くなったが、これは十分天寿を全うしたうえだから仕方ない話。ところが、天は時々若くして才能溢れる人物をお召しになることがある。夏目雅子しかり、本田美奈子。しかり、そして坂本九もその1人……。

あおいの8ミリの技術と監督としての才能は、荒削りながらかなりのものだったことが上司の樋口の口からラスト近くになって語られるが、それは杜氏の仕事ぶりを撮ったコマーシャルの8ミリフィルムを樋口が観た時に直感したらしい。そんなあおいがロスに渡り、広く世界を見て勉強したうえ日本に帰ってくれば……。

そう期待したのは当然だが、この映画の第1章は、飛行機が墜落しその中に佐藤あおいという日本人が乗っていたというニュースが流れるシーンから始まる。なぜこんな若い才能ある女の子を天がお召しになるのか、私はつい神の摂理にも不合理なものがあると思ってしまうのだが……。

## あおいの想いは……？

映画を観ている観客にはあおいの想いは容易に想像できるのだが、それに気づかないバカが当の智也。学生時代あれだけ熱心に映画製作活動を一緒にやり、就職してからも時々接触していれば、普通は少しずつ親密感が高まり、結婚を意識しそうなものだが、どうもその点、この智也は生まれつきニブいらしい。私が心配しているのは、どうも最近そういうニブい男が増えているのでは、ということ。

最悪だったのは、デートカフェであおいが舞台上上がったにもかかわらず、応募する男性が登場しなかったため落ち込んでいる(?)あおいに対して、半分酔った勢いで、本気のような冗談のようなヘンなプロポーズをしたこと。私が思うに、多分これは智也が自分の気持をはっきりと言葉で伝えることができないことに原因があり、これは今ドキの多くの若者に共通する病理現象……？

これでは、あおいが泣き出し暴れ出すのも当然だが、きっと智也はなぜあおい

がそんなに泣き暴れているのか自体全く理解できていないのでは……？ そんな智也のバカさ加減は、千鶴と別れた後あおいの留守番電話に吹き込んだメッセージの中途半端さにも……。なぜもっとはっきりと自分の気持を伝えられないのか、私などはイライラしてしまうのだが……。

## 上野樹里はこんな役が最適……

『スウィングガールズ』（04年）の上野樹里は最高だったが、その後私が観た『笑う大天使（ミカエル）』（06年）は作品の出来がイマイチだったし、『出口のない海』（06年）は役柄が不似合いで、あまり彼女の良さが出ていなかった。しかし、この『虹の女神 Rainbow Song』は、『サマータイムマシン・ブルース』（05年）同様彼女は等身大の自然な姿で演じており、やはり上野樹里にはこんな役が最適……。20歳の記念作となることは確実だが、今後は同世代の美人女優、長澤まさみと出世レースを争ってもらいたいものだ。

2006（平成18）年9月28日記

ミニコラム

### マドンナ 私の女神は……？

上野樹里は映画研究会に入って監督稼業に励んだが、いまから40年前の67年4月、豊中市の待兼山にある大阪大学のキャンパスに立った私が入ったサークルは裁判問題研究会。入会の動機は、抜けるように肌が白く髪の高い1年先輩の美人からの勧誘だったから……？ ところが、このサークルは真面目な勉強の他、学生運動の巣窟だったから、それがその後の私の人生を規定することに……。

期待した美人の先輩とのロマンスはなかったが、私も上野樹里同様、日夜学生運動に励み、その結果ピラ原稿

書きと演説の技術をしっかり身につけたことが功を奏して弁護士になれたから、結果オーライ……？

他方、あのマドンナは早々に結婚したが、実は私はその後何度も彼女とデート(?)を重ねている。坂和「先生」を坂和「クン」と呼ぶのは今や彼女1人だけ。そして会えば今でも互いに学生気分。もっとも私の髪は今や真っ白だし、かつてのマドンナも今や60歳だから、さすがに容色の衰えは隠せないが……？

2007（平成19）年3月9日記